

あ い さ つ

岡山実験動物研究会の発足に当って

会長 猪 貴 義

長年にわたって、関係者の間で懸案とされてきた岡山実験動物研究会が、岡山大学の医・歯・薬・農・理学部、川崎医科大学、ノートルダム清心女子大学、重井医学研究所、林原生物化学研究所、その他機関の有志の参加を得て、昭和57年12月7日、岡山市桑田町、郵便貯金会館において発会した。本研究会が、今後、大学や学部、研究機関のわくを越えて、実験動物と動物実験に関心のある方々の集まりの場として、また、知識と情報の交換の場として役立ち、それぞれの研究の発展と、地域における科学の進展にいささかなりとも寄与することができれば幸いと考える。会員皆様の積極的なご協力をいただき、本研究会の着実な発展をはかってゆきたい。

近年、医学・生物学関連領域の進展に加えて、新たにライフサイエンス研究が加わり、実験動物の質は飛躍的に向上し、多目的の研究に対応できるように改善が加えられつつあります。例えば、各種の近交系、ミュータント系、ヒト疾患モデル動物などが開発され、各種研究に積極的に利用されるようになってきました。また、SPF、ノートバイオ、無菌動物など微生物制御された実験動物も開発され、微生物学分野の研究にとどまらず広範囲の研究領域に広く使用されるようになってまいりました。今後は、発生工学的手法、遺伝子工学的手法を用いた細胞融合動物、遺伝子導入動物なども新しい実験動物として登場し、各種の研究の場において使用されてくるものとみられています。

以上のような研究分野とは別に、製薬・食品工業部門より生産される医薬品、動物薬品、農薬、

食品、食品添加物などの薬効と安全性の検討は、一段と厳密性が要求される時代を迎え、この分野で行なわれる動物実験、生物検定、安全性試験においても良質の実験動物の使用が不可欠となり、GLP (Good Laboratory Practice) 規制にもとづいた動物実験が義務づけられるようになってまいりました。

以上のような分野の進展とあいまって、実験動物の開発・改良、良質の実験動物の生産・維持・供給、衛生、飼育管理など実験動物自身の研究も一段と重要性を加えつつあります。他方、動物実験にたづさわる研究者自身も、実験動物や動物実験法に関する多くの知識や情報なしでは、すぐれた研究成果をあげることが困難な時代となってまいりました。

実験動物と動物実験は不離不即の関係にあり、車の両輪とみられています。各種研究において新しく提起されている多くの問題は、実験動物の側にある研究者と、動物実験の側にある研究者が相互に知識と情報を交換しあい、協力して問題の解決にあたらなければ、問題の解決が困難であることを示しております。

本研究会は、このような関係を十分に配慮し、会の運営にあたってゆくつもりであります。幸いにして、本研究会は現在までのところ、実験動物の側の研究者と、動物実験の側にありながら、実験動物に対して深い理解と関心のある研究者によって組織されました。専門領域を異にする方々の集まりであります。自由な雰囲気を持ち、十分に話し合い、討論を深め、力を合わせて、本研究会の発展をはかってゆく所存であります。

本研究会の発足には、会員以外の方々からも、絶えず激励とご支援をいただきました。これらの方々には引続き本研究会の発展のためにお力添えたまわるよう重ねてお願いする次第です。また、本研究会の設立に深いご理解とご支援をたまわつ

た岡山大学長、大藤 真先生と、重井医学研究所長、妹尾左知丸先生より祝辞をいただき、「岡山実験動物研究会報、第1号」の巻頭を飾ることができました。ここに、厚くお礼申しあげるとともに、引続きご鞭撻をお願いする次第です。

第1回 岡山実験動物研究会経過報告

常務理事 永井 廣

岡山実験動物研究会の構想は昭和57年6月、岡山大学農学部畜産学科家畜育種学教室と同歯学部口腔解剖第1講座との合同セミナーが歯学部内でおこなわれた際に発案された。

同年11月、同研究会発足の呼びかけ人として、猪貴義教授（岡山大・農）、永井廣教授（岡山大・歯）、倉林譲助教授（岡山大・医）が趣意書を回覧し、第1回の岡山実験動物研究会が発足することになった。

会合は昭和57年12月7日（火）午後3時より、岡山市の郵便貯金会館2階会議室において行なわれ、26名の参加者を得た。

会合にかかわる事務処理は上記家畜育種学教室と口腔解剖第1講座が担当した。

まず、呼びかけ人・猪貴義教授によって「岡山実験動物研究会開催に至る経緯」が説明され、呼びかけ人・永井廣教授より猪教授の会長推薦がおこなわれ、満場一致で承認された。ひきつづき、猪会長より参加者の各部門より1名づつの世話人が委嘱され、参加者の同意を得た。

猪会長より世話人を理事と呼称するよう提案があり、会則等については後日理事会にはかることになった。

ひきつづき「岡山実験動物研究会の今後のあり方」が山下貢司教授の座長により討論された。

今回は講師として永井廣教授が「実験動物における発生のひずみの技法別研究法」と題して講演し、質疑をおこなった。

役員は次の通りである。

会 長	猪 貴義（岡山大・農・教授）
常務理事	永井 廣（岡山大・歯・教授）
“	倉林 譲（岡山大・医・助教授）
理 事	鳥海 徹（岡山大・農・教授）
“	小林 靖夫（岡山大・理・教授）
“	田坂 賢二（岡山大・薬・教授）
“	山下 貢司（川崎医大・教授）
“	高橋 正侑（ノートルダム清心女子大・教授）
“	栗本 雅司（林原生物化学研究所・所長）
“	沖垣 達（重井医学研究所・副所長）

さらに午後6時より同会館内において懇親会が催され、和気藹々のうちに第1回岡山実験動物研究会を終了した。

次回は岡山大学農学部内において土川清先生（国立遺伝学研究所、静岡実験動物研究会会長）を迎えて特別講演がおこなわれる予定である。